「物語の画家」としてのターナー

――《カーナーヴォン城、北ウェールズ》におけるバルドの「語り」

藤野 愛充 （立命館大学）

本発表では、ウィリアム・ターナー(1775-1851)による初期の水彩画《カーナーヴォン城、北ウェールズ》(1800)に描かれた吟遊詩人バルドの図像に注目し、作品の新たな解釈を試みる。

18 世紀後半のイギリスでは、古代ブリテンに起源を持つバルドが国民的な英雄として賛美され、イングランド王エドワード 1 世によるバルドの虐殺という中世末期のウェールズの伝説を描いたトマス・グレイ(1716-1771)の詩『バルド』が人気を博した。

ターナーによるこの歴史的風景画にも、雄大なウェールズの風景の中に竪琴を弾くバルドの姿が描かれ、画家自身による詩が添えられている。険しい山の中で暴君エドワードを呪詛する、というグレイの詩における「崇高なバルド」のイメージは、イギリスの多くの画家によって絵画化されてきたが、ターナーは本作の画面をクロード・ロラン風の牧歌的風景で構成し、前景には牧人たちに語りかけるバルドの様子を描いている。

この初期のターナーの画業を、巨匠の「翻案」によって名声を挙げた「壮大な模倣の時代」である、と評した美術史家ケネス・クラークの視点は、その後のターナー研究に多大な影響を与えた。グレイの詩や典型的な理想風景画の翻案・模倣であるという作品の側面が注目された結果、「牧歌的風景の中で、バルドが牧人たちに歌を聴かせる」という場面の特異性が看過され、その図像や内容解釈に踏み込む研究は少なかった。

そこで本発表では、ターナーとグレイの詩の比較を通じて、ターナーがグレイの『バルド』を綿密に踏まえながら詩を自作し、それに続く物語の創作を試みていた可能性を検討する。ここでは、バルドの「語り」は呪詛ではなく、「悲しみの共有」として表現され、その図像化にあたって、ウェルギリウスの『牧歌』に描かれた牧人たちの「歌競べ」のイメージが取り入れられていると考えられるのである。さらに、画家による同時期の油彩画《ドルバダーン城、北ウェールズ》を、登場人物の「語り」の扱いの点で対照的な作品と見なす、これまで先行研究が指摘してこなかった可能性もが看取されるだろう。

以上の仮説設定とその検証を経て、ターナーが本作においてバルドの語りを利用しながら複数の異なる時間を重層的に描き、「戦争・抑圧」の現実に対応する、未来の「平和」をクロード・ロラン風の悦楽郷の風景によって表そうとしていた、との結論を導出する。すなわち、《カーナーヴォン城、北ウェールズ》は、歴史的主題に対する画家の関心が結実し、自ら詩作を開始する画業の「転換期」に描かれた重要な絵画として位置づけられる。巨匠の強い影響下にあり、未だ画家自身の天才性が十分に発揮されていないとされるこの初期の作品の中にすでに、過去の芸術家の「翻案」を超えたターナーの想像力、それによって語られる、画家独自の「物語」を見出すことができるのである。